

## 学童期小児の Cariés リスク判定に関する研究 — 齲蝕活動性試験と生活習慣に関する アンケート調査との関連性について —

○高橋美如、今村まり子、尾崎正雄\*、木山純子\*  
本川 渉\*

福岡歯科大学附属病院歯科衛生士部

\*福岡歯科大学成長発達歯学講座

成育小児歯科学分野

**【目的】** 齲蝕予防に重点を置いた口腔管理を実施するには、将来口腔疾患に罹患する危険性を予測した上で適切な保健指導を行う必要がある。指導の際には、問診や口腔内診査の結果を元に齲蝕罹患の原因を推定するが、口腔内の状況を評価する手段の一つとして、齲蝕活動性試験を元にした Cariés リスク判定を実施している。しかし、判定結果を元に保健指導を行う場合、担当者の経験や知識等により指導の要点が異なる恐れがある。そこで、適切な保健指導の要点の把握を目的に、学童期小児に対して齲蝕活動性試験と保護者へのアンケート調査を行い、試験結果と齲蝕罹患状態、生活習慣等との関連性を観察した。

**【対象および方法】** 長崎県の某小学校4年生60名に対して、口腔内検診と齲蝕活動性試験である Cariostat<sup>®</sup>、Dentocult<sup>®</sup> SM、Dentocult<sup>®</sup> LB、Dentobuff<sup>®</sup> Stripを実施した。そして各種試験間における判定結果の関連性、齲蝕活動性試験と齲蝕罹患状態との関連性等を観察した。また保護者へのアンケート調査もを行い、生活環境及び生活習慣との関連性を調査した。

**【結果及び考察】** 各種齲蝕活動性試験間の関連分析を行った結果、Dentocult<sup>®</sup> SMとDentocult<sup>®</sup> LB、Dentocult<sup>®</sup> SMと Cariostat<sup>®</sup>、並びに Cariostat<sup>®</sup>とDentocult<sup>®</sup> LBが高い相関を示した。また齲蝕罹患状態と相関が認められた齲蝕活動性試験は、Dentocult<sup>®</sup> SMであった。アンケート調査との関連性を分析した結果、Cariostat<sup>®</sup>と歯磨き習慣、Dentocult<sup>®</sup> SMと生活環境、歯磨き並びに間食習慣が高い相関を示した。また、齲蝕罹患状態は歯磨き並びに食生活習慣に高い相関を示した。以上の結果から、*Streptococcus mutans* 数及び *Lactobacillus* 数が多い場合の具体的な指導項目として歯磨き習慣と間食習慣の改善の必要性が示唆された。

## クリアシールF<sup>™</sup>に関する臨床的研究

○萩尾真紀、久保山博子、林 秀、本川 渉  
福歯大・小児歯

**【緒言】** 小児歯科臨床において小窩裂溝部の齲蝕の予防および抑制に、フッ素徐放性シーラントが広く応用されている。近年、隣接面を含む平滑面の齲蝕抑制を目的として、クリアシールF<sup>™</sup>（クラレ：以下CR）が開発された。そこで演者らは、外来患児の隣接面および平滑面にCRを臨床応用し、約2年間経過観察を行ったので報告する。

**【対象および方法】** 対象は本学小児歯科を受診した小児で、初診から約2年経過した59名118歯面についてCRの塗布を行い、初診時の齲蝕罹患の状態、適応部位さらにリコール時のCRの保持状態、齲蝕の進行度について検討を行った。

**【結果】** 1. 初診時の齲蝕罹患状況は、健全33.9%、C0 54.2%、C<sub>1</sub> 11.9%であった。  
2. 適応部位は、平滑面89面（75.4%）、隣接面29面（24.6%）であった。  
3. 保持状態は、完全保持23.6%、一部破折・剥離22.9%、摩耗42.4%、完全脱離8.5%であった。適応部位別で見ると、平滑面では、完全保持25.8%、一部破折・剥離25.8%、摩耗39.3%、完全脱離9.0%、隣接面では、完全保持27.6%、一部破折・剥離13.8%、摩耗51.7%、完全脱離6.9%であった。  
4. 齲蝕の進行度は、変化無し99.2%、齲蝕が進行したもの（C0→C<sub>1</sub>）は0.8%であった。

**【考察】** 今回の結果より、CR塗布2年後の保持状態は全体的に摩耗が多く、そのほとんどがCR周辺部であった。林ら<sup>1)</sup>は2年後のCR塗布周辺部において、高濃度のフッ素の取り込みや顕著な耐酸性の向上を認めることを報告していることから、摩耗に対しては再塗布の必要性はないと思われる。しかし、早期に脱離・破折した場合は再塗布の必要があると考える。

また齲蝕の変化は、齲蝕の進行が1例のみ認められたが、多くは進行を認めず、隣接面および平滑面に対してCRを使用することは新たな齲蝕発生、齲蝕予防に対して有効であると考えられた。